

叢談

# カードの世紀

第199回

## 日本の「現金社会」を直視し、 加盟店手数料問題を考える

### 私の「現金」での買い物事情

櫻井 澄夫

コロナ禍があっても、  
もうすぐ200回

この連載も次回の6月号で通  
算200回になる。

2004年の5月号を第1回  
目として、毎年9月号を除い  
て、年11回書いてきた。連載開  
始以来18年が経過した。もうす  
ぐ20年だ。

この間、本誌の執筆者の方  
が、何人か鬼籍に入られた。特  
にこの数年が多い。

勤務先は違うが、何十年もの  
間、親しくしていただいた方も  
あったし、企画して一緒に国内  
や海外に旅行した人、私の息子  
をかわいがってくれた人もあっ  
たから、寂しい限りだ。「次は  
私の番：」——毎月原稿を書き  
ながら、そういった思いがふと  
脳裏をかすめることがある。

私は他の分野の媒体でも1  
〜10年の連載をしたことが何回  
かあるが、20年というのは私と  
しても初めてだ。

連載というと、これも余談だ  
が、前に私がある日本の月刊雑  
誌に1年間連載した文章が北京  
の外国語大学の授業に使用され  
たことがあった。私はそのこと  
をまったく知らず、偶然の機会  
に知り合った人からそのことを  
聞いた。使われたのは日本語の  
授業である。

また、ある雑誌に連載した文  
章が、単行本になったこともあ  
る。これが私の最初の単著にな  
った。この2年ほどは、ご多聞  
に漏れず、コロナ、コロナでこ  
の連載の内容もそれまでとは一  
変した。海外取材もままなら  
ず、海外からの予定されていた  
訪問者も何人か日本に來られな  
くなり、予定が狂った。

そこで、海外絡みの著作の企  
面に支障が生じたので、分野は  
違うが、地元の横浜や神奈川県  
に関する書籍の制作に方向を転  
じて、エネルギーをそちらに向  
けることにした。いまでは「在  
宅」が推奨されるし、外部での

飲食や会合も減ったから、読書  
や調べ物に使用する時間は相当  
増加した。平均すると毎日2〜  
3冊の書物が自宅へ配達され、  
多い日は5冊くらい来る。

この連載を読んでいる知り合  
いの方から、私が本をよく読んで  
いると指摘を受けることがあ  
るが、戦時中の「灯火管制  
下」ではないが、「コロナ禍」  
の副産物として、功罪相半ばす  
る面はあるが、自宅での学習  
時間が否応なしに増え、その結  
果、文章の内容にも影響を与え  
たことは間違いない。

灯火管制といえば、ニューヨ  
ークで大停電があった時に、妊  
娠した人が多かったというニュ  
ースを聞いたことがある。わが  
家では残念ながら、配偶者もも  
ういないし、そんな歳でもない  
が、コロナ禍が「月刊消費者信  
用」の文章の内容にかなりの影  
響を与えたということは、少々  
書き残しておきたい。

「在宅勤務」をしている読者

の方の生活にも、恐らく何らか  
の影響が出ていることだろう。  
マイナスもあろうが、プラスの  
良い変化につながることを期待  
したい。

実証主義、原典主義で  
考え、書いてきた

本誌の文章は、一つのテーマ  
を2〜3回に分けて取り上げる  
こともあるが、基本的には読み  
切りだから、毎回かなり異なる  
テーマを決め、題材を集め、な  
るべくほかでは紹介されてこな  
かった内容を書こうとしてき  
た。つまり、みずから感じた問  
題点、疑問点にこだわりを持つ  
ということだ。

それゆえ、実証に徹しよう  
と、日本やアメリカ、そのほか  
の国の関連資料や書籍、カード  
などの現物を極力集め、「真実」  
を追求してきた。俗っぽい言い  
方をすれば、「へー、そうなの」  
「知らなかった」という「線」  
を目指すということだ。

何度も言うように、そうせざ  
るを得ないのは、この業界や業  
務に関しては、あまりに通説、  
俗説、巷説が多く、史料批判を  
経ない孫引きがいつまでたつて  
もまん延しているからだ。メデ  
イアは確認もせずに、そのまま  
新聞・雑誌の記事、書籍、テレ  
ビ、ラジオで紹介する。

これまでの政府関係の資料や  
記録、大手企業や業界団体の刊  
行物などにも、誤りは少なくな  
い。残念ながら私の本誌掲載の  
文章など、読みもしないような  
人も少なくないとお見受けせざ  
るを得ないのだ。こういった主  
要な媒体等での間違った情報を  
「感染」させ、放置する限り、消  
費者の誤解は解けないだろう。

私はペンネームで書くことも  
あるし、表には名前が出ないよ  
うな「代筆」も行い、ほかの分  
野での執筆活動もしているが、  
やはり実証主義、原典主義でや  
ってきた。その結果か、代筆で  
書いたものの方が売れたり、そ

ちらの方が出版関係の賞をもら  
ったりしたのは皮肉だが、この  
数年に私が企画段階から関与し  
た本（いずれも共編著だが）  
は、初版の出版以後、ほとんど  
増刷されているのは、われなが  
ら喜ばしく、出版社に対しても  
顔向けができたと考えている。

「文章を書く」ということ  
は、「恥をかき」ことだといわ  
れる。恥はかきたくないが、た  
とえ内容の充実度が理想的でな  
くても、未知の分野や事項の解  
明には「挑戦」していくという  
姿勢をとりたくなるのは、まあ  
性格的なものだろう。

年月は見識や  
現状の理解を生む

この業界に入って半世紀、こ  
の連載を始めて20年近くになる  
わけだが、業務関連の媒体に書  
き始めて40年前後になった。そ  
の間、クレジットカード、ペイ  
メントカード、電子決済、ある  
いは非現金決済などの業務も大

きな変化と進歩、発達を遂げた。

ただ、この連載でもたびたび指摘するように、ペイメント分野の進歩や発達を紹介する最近の刊行物は、最新の技術や、中国などにおける新しい決済システム、非現金決済に関するものが多くを占め、過去の経緯や発展過程に対する関心が薄い。私が過去にこだわるのは、現状を理解することは過去を知らないと不可能であるという確信を持つているからであって、そういうことに対する認識や知識がないと、現状の理解ができないという結論に達するからだ。

### キャッシュレス社会に ほど遠い日本の現実

具体例を伴わない抽象的な意見では説得力がない。そう考えて、最近、この連載で、私の居住地付近の各種の事情や話題を取り上げてきたのだが、その一環として、私の日常生活での生

活費の「支払」事情にあえて触れておこう。その意図すること、横浜のような所でも、「現金」決済はまだまだ一般的であり、どう見てもキャッシュレス社会にはほど遠い現実があるからである。

日本でもアメリカのように支給金用のEIPカードを配布すればよいのだが、実際の生活に活用するには問題が大きい。なぜなら、後述するように横浜のような大都市でも、カード類を受け入れない場所が少なくないからだ。マイナポイントがもらえる場所も制限されているから、個人が特定の店を指定するとそこしかポイントがもらえない。私の場合だと、近くの中堅スーパーにしたのだが、最近、この店はあまり使用しない。このスーパーのカードに入金した金額は、使わない限り無駄な入金になりかねない。どこか一軒の店でしか買い物をする人は少ないだろう。あつちで

もこつちでも支払がキャッシュレスにならないのでは、現金の所持や使用はやめられない。

そのことは大阪市の生活保護対策で、アメリカのEBTカードに類似したカードを配ること成功しなかった事情と根は一つで、つまり長い間にペイメントカードを政策として育ててこなかったことのつけが回ってきたのだ。実際の日常生活に広く使用できるようなカードや制度でない、現金の代わりにはならない。

既存の支払システムに肩代わりさせようと思っても、その要求に見合うシステムが存在しないから、出来立てのシステムを含めたキャッシュレスなら何でもいというような選択しかできない。

はつきり言えば、日本にはまだまだ現金の代わりに広く利用できるような支払手段はないから、ポイントで「釣る」ことしかできないのだろう。

わが人生でキャッシュレス推進の最先端で働いてきたにもか

かわらず、現金決済について語らい、キャッシュレスに対する悲観的な意見を言うのは、見方によってはおかしいと思われるかもしれないが、現実の社会のありようを直視し、わが国の「現金社会」の実像を直視する必要があろう。

私がこの連載で紹介してきたアメリカや中国(本土)、香港などのように、日本でもコロナ禍対策として支給金をペイメントカードにより給付することが可能であったのか、というような疑問に対して、日本ではそのような環境が整備されてはいないこと「重さ」を、いままさらながら考える機会にしたいのだ。私がいまだ社会に根付いている現金決済について書くのは、キャッシュレス環境の未整備を問題提起するきっかけにしたいという願望に根差している。

### 鮮魚と鎌倉野菜を 市場で買う

話を進めよう。

私が住む家は、人口ではわが国第二の都市、横浜市の一歩南の栄区という区であり、JRの戸塚駅と大船駅の間あたりに位置する。すぐ南は鎌倉市の大船である。

JRでは東海道線や横須賀線の戸塚駅、あるいは大船駅を利用する。戸塚駅からは横浜市営地下鉄にも、大船駅からはJRの根岸線にも乗れる。市営地下鉄を使えば、新横浜に出て新幹線にも乗れるし、横浜市の中心

部や東京方面に行くにも、さまざまな交通機関が利用できる。

横浜市民のかかりの数は、東京方面に職場があるが、横浜市にも大きな企業があり、大きなデパートやスーパーも多数あるから、東京あたりと都市的な買い物環境は大差ないと言ってもいいだろう。

私が住むのは横浜市の南の端であるし、すぐ南は相模湾だ。三浦半島や、西の伊豆半島も近く、そして南の海上には伊豆七島がある。魚もとれるが、このあたりは農産物も特徴がある。外国人宣教師から聞いた話を参考に、地元の農家が栽培した野

### 現金しか使えない 店舗がいっぱい

私が主に食品の買い物をする店を列挙してみよう。

#### 野菜や魚の店

- (1) 大船駅前の「大船市場」という野菜専門の大きな市場がある。安いという評判だ。カードは使えない。
- (2) 駅前の市場。

商店街に野菜、魚、肉などの店が入っている市場がある(写真1)。魚も新鮮で種類も豊富。カードは使えない。

- (3) 鈴木水産。大船駅前の商店街にある鮮魚の専門店。すしなどもある。カードは使用できないが、2階のすし屋(「豊魚」)は使用できる。本店は三浦半島の三崎港。マグロ問屋。各地に支店がある。
- (4) 矢島農園。大船から横浜市の栄区(田谷町)に入った所にある農園。週に4日営業しているが、アクセスは車でないと不便。安いし新鮮。すぐ隣に畑。カードは使えない。こうした農園や農協の経営の店はあちこちにある。

- (5) 近所の魚屋(飯島町)。自宅から歩いて5分ほどの店。最近、よく使用する。生の魚や、刺し身、煮魚、カキ、海藻などもある。昔風の魚屋。カードは使えない。
- (6) そのほか、大船(イトーヨ



大船市場。(写真1)



鎌倉市農協連即売所。(写真2)

カード、西友ストア)や戸塚のスーパー、ショッピングセンター(東急ストア、モディ、アピタ、トツカーナなど)で買い物をすることもある。多くはカードを受けるが、使用できない店もある。

(7) 鎌倉市農協連即売所(写真2)。鎌倉駅から海の方角に5分ほど。市内と横浜市の長尾台の23軒の農家が季節野菜を売る。4班に分かれ、4日ごとに入れ替わる。大型店では見かけないような種類の野菜を売る。カードは使えない。私は常連。この地域での食品の購入には、現金が不可欠であることが認識されよう。仮に生活保護用であろうが、支給金であろうが、ペイメントカードのようなものを配つても、食品のような生活必需品の購入は従来通りには行えないということになる。

### コード決済をやめたお店も

あった。

日本の銀行系クレジットカードは、誕生した当初から銀行が直接にカード発行をすることができず、分割払いも政治家などを巻き込んだの信販会社などの反対でできなかったため、先進国では当然の機能であったリボルビングなどのクレジットカードの基本的な機能を持たせられないまま30年ほどの時間が流れてしまった。これが今に至る日本のクレジットカード業務の収益構造と発展の速度に決定的な影響を与えた。当時には、いろいろな事情があったのであろうが、このことが日本のクレジットカードの性格や銀行の業務の収益性にも大きな影響を与えた。日本のカードの異質さに対し、アメリカからの外圧によって、リボ・分割が認められるようになったが、日本のカード会社は栄養が十分に与えられぬまま身長ばかり高くなった人間のようなものだろう。経営基盤は

食料品店ではないが、横浜の代表的な居酒屋街である中区の野毛町でのカード加盟率は50%程度ではなからうか。私が調べたところ、伝票単価が5000円から8000円あたりが、加盟するかどうかの分岐点であるようである。この線以上になるとカード加盟店になっている店が多い。だから、ラーメン屋、焼き鳥屋、大衆食堂などは、カード加盟店になっていない店が多い。少額の支払には、電子決済には向いているだろうが、ある程度の金額以上にはなかなかじみにくいだろう。このような事情は都心のスーパーやデパ地下ばかり利用している人には理解できないだろう。

前にも、大船での、キャッシュレスにはしないと、コード決済をやめたという商店店頭での表示を写真入りで紹介したが、つい最近も大船の駅近くで、〇〇Payという会社のコード決済を取りやめるとい

頭での掲示を見た。

「〇〇Pay決済利用終了のお知らせ。〇〇Payを利用した詐欺が多いため、取扱いを終了しました。ご不便をおかけしますが、ご注意いただきますようお願い申し上げます」(〇〇の部分は実際にはこの決済企業の名称が記載されているがここでは省略)。

### 日本の加盟店手数料は本当に高いのか

最近、日本のいわゆる銀行系のクレジットカードの加盟店手数料が高いので、カード決済が普及してこなかったとの主張が目立つ。それに対しては本誌をも含め、意見があるようだ。

大体から、無利子で支払を後払いにでき、カード発行が回収リスクを負うクレジットカード、その名の通り即時払い(デビット)のカード決済やコード決済など、回収リスクを伴わない決済手段と、比較するのが間

違いだろう。当然ながら無利息で後払いのクレジットカードには、給与支給後で支払うことが可能だから、販促効果も期待できる。アメリカではまだ週給制があるが、月給制度の普及とカードの支払には密接な関係がある。

クレジットカードは、その進化の初期に比較的短い日数での後払いのカードと、リボルビングを前提、あるいは利息収入を銀行の収益源として企画されたバンククレジットカードの3種のカードによって発達してきた。前者の代表的なカードがT&Eカードであり、チャージカードとも呼ばれた。後者がクレジットカードとも呼ばれた。両者をまとめてクレジットカードと呼ぶこともある。

両者はその性格を生かして独自の発展を遂げていったが、もともとT&E系のクレジットカードと、銀行のクレジットカードとは加盟店手数料率に差が

ぜい弱だった。

そういった重要な経緯を正確に理解せずに、現状の数値のみを重視して、単純に国際比較するのは歴史を無視した見方だろう。もし、こうした歴史を学ばずに政策の決定がされていたり批判しているとしたら、何をかいわんやである。

### 歴史を知ってこそ いまがわかる

そこで、歴史認識のほんの一例として、せんえつながらここで関係者の方々に質問をしておきたい。

(1) 日本のクレジットカードの売上手数料率は日本でクレジットカード業務が開始された61年当時、何を基準に決定されたと思われるか、その経緯を簡記せよ。また、その手数料率が現在の日本のクレジットカードの手数料率にいかなる影響を与えていると思われるか、思うところを記せ(5000字程度。長く

なっても可)。

(2) 日本で最初にクレジットカードの加盟店を整備したと思われるアメリカン・エキスプレスの加盟店手数料の業種別手数料率と加盟店契約書の形式について知るところを記せ。また売上額に応じた手数料率の低減制度について簡記せよ(細かな数値については示す必要はない。2000字程度。長くなくても可)。

ご存じの方もおられるだろうが、手数料率に関する議論をするなら、このくらいのことには知っておいていただきたい。

出版して10年近く経過してしまっただが、箭内昇氏の『メガバンクの誤算——銀行復活は可能か』(中公新書)を最近読んだ。内容は古くなったが、シティグループの最大の収益源がカード業務であること、その収益構造について解説しているが、当時、日本の大手銀行の消費者金融は融資残高の15%に過ぎない

が、シティグループでは部門別収益は、消費者金融部門が50%を占めていることを指摘している。

私は80年頃にアメリカのバンククレジットカードの収益構造を調べたことがあったが、ローン金利からの収益が高いのに驚いたことがある。日本でのカード会社の収益の多くは加盟店手数料によって占められていたの

は言うまでもない。その時の驚きが、最近の手数料率に関する議論と結び付いていることにも、あらためて驚かされる。考古学では遺物などの年代を探るために編年研究というものを行うが、ペイメントシステムでも編年研究が必要だ。さまざまな要素や事項を年別別に並べてみると、見えてくるものがある。

話はあちこちに展開するが、路上観察はさまざまな日本の事情を教えてくれる。